ルソーの夢
——むすんでひらいて考——（その五）

海老沢敏

四、〈ルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲〉

前章で引用した明治十五年一月三十日（および三十一日）の公開大演習のプログラムは、正式には《唱歌并音楽演習手続書》と名づけられているが、当日会場で配布されたこのプログラムのほかに、メイスンが書いた手書の英文プログラムが上伊那図書館に所蔵されている。この英文プログラムの〈見渡せば（箏胡弓合奏）〉の項目は〈Rousseau's Dream (Koto & Jap. Violine)〉と記されているのである。ということは伊沢修二を中心として音楽取調掛の面々が、〈見渡せばあをやなぎ〉、ならびに〈見渡せばやまべには〉の歌詞をつけた旋律、あるいは歌が《ルソーの夢》と題

二つの稿本によって伝えられている伊沢修二の《唱歌略説》の中で、《見渡せば》の原曲が、ジャン・ジャック・ルソーの作であり、それも彼ルソーが睡眠中に夢の中で作曲したと説明されている点から論じてみることにしよう。

伊沢がこの解説原稿を執筆するに際して、メイスンから情報の提供や指導を仰いだことはうたがいない。

されたものであったことを知っていたことになるだろう。

事実、この旋律は欧米にあっては、当時、すなわち十九世紀後半には、この《ルソーの夢》というタイトルで、かなりひろく知られていたのであった。その意味については、やがて述べることになるが、伊沢修二がメイスンからこのタイトルとともに、このタイトルがつけられた由来についても説明を受けたであろうことが推察されるのである。

前章の最後に遠山文吉氏の唱歌集ならびに掛図の歌曲の出典調査について触れたが、そこでも、メイスンがたずさえてきたと考えられる教材集《ナショナル・ミュージック・チャーツ》および《ナショナル・ミュージック・リーダーズ》の中にも《見渡せば》の原曲は見出されず、したがって出典は明らかにされていなかった。

それでは、メイスンがこの《ルソーの夢》を日本にたずさえてこなかったのであろうか。

メイスンは上記の音楽教科書のほか、さらに多数の教科書を来日前後に、単独または同僚の協力をえて編集しているが、その中には初等中学校(グラマー・スクール)の高学年ならびに中学校(ハイ・スクール)用の《アブライジド・フォース・ミュージック・リーダー》(注1)がある。これはメイスンのほか、J・アイヒベルク、H・E・ホルト、J・B・シャーランドの三人が加わっての編集であるが、ボストンのジン・アンド・ヒース社が一八七八年に刊行したこのリーダーには、讃美歌と二声、三声の世俗曲、それに愛国歌が多数収められている。

その中に《我を導きたまえ、おお、汝偉大なエホバよ(Guide me, O Thou great Jehovah)》なる讃美歌が見出される。(譜例①)これこそ《ルソーの夢》の旋律であり、したがって後に音楽的な説明を加えることになるようなわずかな差異が見られこそすれ、《見渡せば》の旋律の原形を示しているのである。この讃美歌についても、詳しい説明は後章にゆずるが、メイスンがアメリカにあってこうした讃美歌を通じて《ルソーの夢》に親しんでいたことが明らかとなるだろう。そればかりではない。一八七八年といえば明治十一年であり、メイスン来日(明治十三年)の二年前であることから、当然来日に際してこの教科書も携えてきたであろうことが推測されるのである。

(注1)《The Abridged Fourth Reader: Being a Selection of Songs and Concerted Pieces with Accompaniment for the Piano; Especially Adapted for High Schools and the Upper Classes of Grammar Schools; To which is Prefixed a Complete System of Solfeggios and Triades for Practice. By Julius Eichberg, H. E. Holt, J. B. Sharland, Luther W. Mason.

◀図版1

THE ABRIDGED

FOURTH MUSIC READER:

BEING A

Selection of Songs and Concerted Pieces

WITH ACCOMPANIMENT FOR THE PIANO;

ESPECIALLY ADAPTED FOR HIGH SCHOOLS AND THE UPPER CLASSES OF GRAMMAR SCHOOLS;

TO WHICH IS PREFIXED

A COMPLETE SYSTEM OF SOLFEGGIOS AND TRIADS FOR PRACTICE

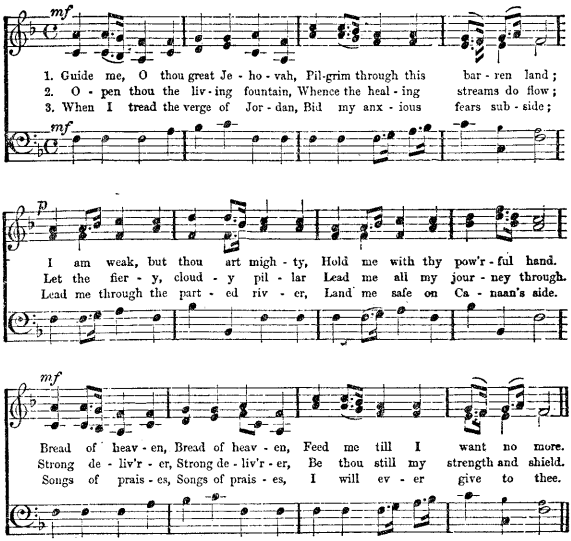
BY

JULIUS EICHBERG, H. E. HOLT,
J. B. SHARLAND, LUTHER W. MASON.

BOSTON.
PUBLISHED BY GINN AND HEATH.
1878.

◀譜例①

GUIDE ME, O THOU GREAT JEHOVAH.



Boston. Published by Ginn and Heath. 1878.（ボストン市立図書館所蔵、図版1）

このようにメイスンがプログラムに記し、かつ以前から親んでいた《ルソーの夢》から、伊沢が〈ルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲〉ないし〈ルーソウ氏カ睡眠中ニ作リタル曲〉という注釈を導き出したことは、したがってほぼまちがいないといえるだろう。それでは《見渡せば》の戸籍調査をおこなった遠藤宏が、なぜこの曲について〈ルーソウが一七七五年に作曲したもの〉と結論したものであろうか。《明治音楽史考》の著者は、さらに〈米英にも数種の歌詞がつき〉と語っているが、故馬場氏が調査究明に挫折されたこの二点について、つづいて明らかにしてみることにしよう。

遠藤宏（一八九四〔明治二十七年〕――一九六三〔昭和三十八年〕）は東京音楽学校教授や東京大学文学部講師をつとめたほか、有名な南葵音楽文庫にも関係していた。《明治音楽史考》中の〈三、歌曲の戸籍〉執筆にあたっては、当然、外国文献を参照する必要があったが、伊沢修二の《唱歌略説》を再発見し、紹介するという栄誉を担った彼はこの《見渡せば》の〈戸籍調べ〉にどのような手続きを執ったであろうか。私は、彼遠藤宏が東京音楽学校や南葵音楽文庫所蔵の文献類を調べたものと自然に推測するのである。〈歌曲の戸籍〉執筆がおこなわれたと推定できる昭和十年代の後半ならびに昭和二十年代の初頭の時期には、東京音楽学校には《グローヴ音楽辞典》の初版（全四巻一八七九年―八九年）が、また南葵音楽文庫（当時閉館中）には同辞典の第二版、いわゆる〈フラー＝メイトランド版〉（全五巻、一九〇四年―一〇年）が備えられていた。遠藤宏はそのいずれを閲覧したにしても、〈Rousseau's Dream〉なる項目を参照したにちがいない。

この項目には、この《ルソーの夢》が十九世紀初頭に英国でもてはやされた歌（エア）であったこと、この名称で最初に立ち現われたのが、ヨハン・バプティスト・クラーマーの変奏曲（一八一二年）らしいこと、わずかな変化をともなって、四半世紀前に《メリッサ（Melissa）》なるタイトルで見出されることなどが記述されている。(注2)

（注2）現在使われている《グローヴ音楽辞典》第五版（エリック・ブロム編、全二〇巻、一九五四年、〔補巻一九六一年〕）には、この最後の《メリッサ》についての説明は省略されている。

このグローヴの音楽辞典の記述については、のちにもう一度立ち戻ってこなければならないが、ここでは差し当って、遠藤説の由来を尋ねることが主眼なので、その点にしぼってひとまず論を

進めよう。《グローヴ音楽辞典》には、《メリッサ》についての記述はあっても、譜例は挙げられていない。遠藤宏はつづいて探索をどのように続けていったものであろうか。

これも私見によれば、当時ひとり南葵音楽文庫が所蔵していた参考文献で、《メリッサ》について調べたものと考えられるのである。その資料が《大英博物館印刷譜所蔵目録・一四八七年――一八〇〇年(Catalogue of Printed Music published between 1487 and 1800 now in the British Museum.)》(ロンドン、一九一二年)にほかならない。その《メリッサ》の項目を見ると〈歌曲、《スウィート・メリッサ(Sweet Melissa.)》(一七八七年?)を見よ〉とあり、当該の《スウィート・メリッサ》を見ると次のような記述にぶつかる。

〈いとしのメリッサ、美わしの乙女よ! Sweet Melissa, lovely Maiden! メリッサ〔歌曲〕C・ジェイムズ詞。〔ルソーの夢の節に合せて〕ピアノ・フォルテ、ハープ、またはギター用に編曲。J・デイルのために印刷。ロンドン、〔一七八八年?〕二つ折版。G.三七七(一七)〉

この記述でも、《メリッサ》と《ルソーの夢》が関係づけられていることが理解されるだろう。ところで、この《メリッサ》は、同じ所蔵目録のルソーの項目、それも《村の占師》のところでも挙げられているのである。ルソーの《村の占師》は著名な幕間劇であり、種々の印刷譜も刊行されているが、大英博物館のこの所蔵目録にも、そうした総譜のほか、このオペラから抜け出たピースも採り上げられている。

その中に次のようなピースが記録されているのだ。〈〔第八場・パントミム。〕スウィート・メリッサ・ラブリイ・メイドウン! を見よ。〔歌曲〕……〔ルソーの夢の節に合せて〕編曲。〔一七八八年?〕二つ折版。G.三七七(一七)〉

ところが、この個所のすぐ上には、なお、次のようなエントリーがある。〈〔第八場・パントミム。〕キュテラ島の森の茂みで Dans les bosquets de Cythère。新ロマンス。〔パリ、一七七五年?〕八つ折版。G.三六二・e・(一一五)〉(傍点筆者)

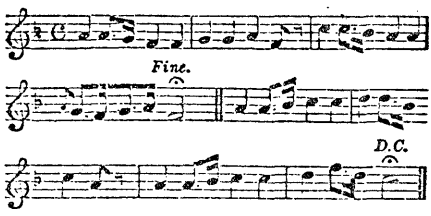
所蔵目録には当然ながら楽譜は掲げられていない。そのため《明治音楽史考》の著者は、《メリッサ》とおなじく〈パントミム〉と指示されたこのルソーの《村の占師》の〈新ロマンス〉《キュテラ島の森の茂みで》を《ルソーの夢》の原曲と考え、その出版推定年代である一七七五年を作曲年と結論したものであろう。

それでは《ルソーの夢》とはいったいなにを意味するのであろうか。この点をくわしく論じてゆくためには、まず《グローヴ音楽辞典》の当該項目を紹介することからはじめなければなるま

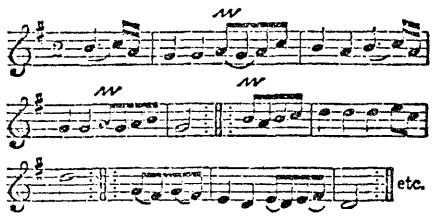
い。ここではおそらく遠藤宏が参照したものと思われる第二版（フラー＝メイトランド編）を訳出してみよう。

「ルソーの夢（Rousseau's Dream）。十九世紀初期に英国で大いに流行した曲。この名ではじめて立ち現われたのは、たぶん〈ピアノ・フォルテのための主題と変奏曲、J・B・クラーマーにより作曲され、デラウェア伯爵夫人に献ず。ロンドン、チャペル〉〔一八一二年〕（譜例②）

しかしこの曲は四半世紀前に〈メリッサ。チャールズ・ジェイムズ殿詞。ピアノ・フォルテ、ハープまたはギター用に編曲。ロンドン、J・デイル、一七八八年〉のタイトルで（まことにわずかな変化を伴なって）見出される。この旋律は《村の占師》の第八場の《パントミム》に出てくるものであり、次のようなかたちである。（譜例③）



▲譜 例 ②



▲譜 例 ③

〔この節が英国に入ってきたのは、うたがいもなく、バーニー博士によって、このオペラが《賢い男》として翻案されたことによってである。はじめて讃美歌に改作されたのはトマス・ウォーカーの《リポン博士の曲集続篇》（一八二五年）においてであると思われるが、この節は《聖歌集》（一八四三年）で〈ルソー〉の名がつけられて出てきたあと、讃美歌の節としてひろく流行するようになったものである。〕〈夢〉というタイトルの由来は明らかでない。」

〔　〕内はW・H・G・フラッドが追加したものであるが、それ以外はグローヴによる記述である。さて、私たちは、この《グローヴ音楽辞典》の記述が正確であり、正鵠を射ているかどうかについてひとつひとつ吟味してみる必要があるだろう。辞典の記述のように、この《ルソーの夢》は十九世紀初頭に、英国でたいへん親しまれたものであったらしいが、それにしては不分明なことも多すぎるように思われるのである。

（つづく）

（国立音楽大学）